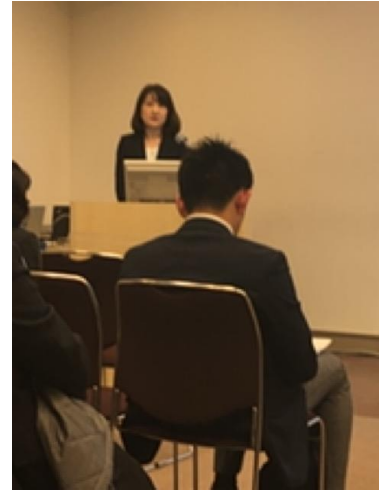


チームアプローチによるリハビリ意欲の向上・  
離床効果がみられた症例  
～セラピードッグとのふれあいを通じて～

○林 文月・小山 秀一・瀧島 麻玲・牧野 由美・鈴木 敦子・  
内田 順子・長嶺 大吾・岸下 結花・森松 静・進藤 晃



【はじめに】

当回復期リハビリテーション病棟では集中的なリハビリテーションを実施し、心身ともに新たな生活適応機能となった身体状況で自宅や社会復帰支援のケアを行っている。入院患者の高齢化に伴い対象の特性や帰宅後の環境に考慮したリハビリの提供は大きな課題と言える。

当院では入院環境の中で、「癒し」や「楽しみな時間」といった非日常の時間を提供する取り組みの一環としてセラピードッグによる集団セラピーと訪問セラピーを行っている。この度、セラピードッグとのふれあいを重ねることで離床の動機付けやリハビリ訓練意欲に効果を見た症例についてここに報告する。

【方法】

- ・セラピードッグの効果について学習会開催
- ・セラピードッグとのふれあい時間の設定
- ・観察表を用いた患者の様子（セラピードッグ実施時の表情・動作・発語の評価）
- ・「できるADL」と「しているADL」の確認
- ・多職種合同カンファレンス開催

【考察】

「セラピードッグとのふれあい」という機会を提供し犬と過ごす時間の共有により、目的のある離床やリハビリ意欲の向上が確認された。加齢による認知機能低下がある患者や基礎疾患やそれに起因した周辺症状によりリハビリ意欲の低下した患者に対し日常生活の中でこのような機会を提供することを繰り返すことでリハビリ効果が期待できFIMの向上の足掛かりになるのではないかと考える。

【おわりに】

当病棟におけるセラピードッグとのふれあう機会の設定は開始したばかりである。患者が自宅や社会へ復帰するための後押しが期待でき、今後もこの活動を継続させていきたい。